「ごきげんにいこう！」

作：湯浅　誠
語り：上白石萌歌

兄は障害者で、小さいころから車椅子だった。
私が車椅子を押していると、兄は、人のいない通りを歩きたがった。
向かいから人が歩いてくると、
「そこを右に」「あそこを左に」と指示してくる。
曲がったって、またその通りでも人が歩いてくることはあった。
兄はまた、曲がるように言ってきた。
自分の身体を人に見られるのを嫌がった。
結局、クネクネジグザグと進むのだった。

たしかに、見られるのは嫌なものだった。
ズケズケジロジロと、好奇心丸出しで見てくる人。
コソコソチラチラと、こちらに気づかれぬように、見てくる人。
すぐにわかるんですけど…。
嫌なのは私も同じだった。
だけど、不満でもあった。
別に悪いことしてるわけじゃない。
しょうがないじゃないか。
そういう身体で生まれちゃったんだから。
しょうがないじゃないか。
兄ちゃんは悪くないじゃないか。
もっと堂々としろよ、と思っていた。

あるとき、兄の指示を無視して曲がらなかったことがあった。
夕方。木造平屋の市営住宅街の中。
右には生垣があって、左には集会所とひろばがあった。
歩いてきたのは、若い大人の男性だった。
チラッと私たちを見て、その人は通りすぎていった。
それだけだった。
何を言われたわけでもなく、嗤(わら)われたわけでもなかった。
でも兄は、おそろしく怒った。
母親に、「誠にはもう二度と迎えに来てほしくない」と訴えた。
私は不満だった。
兄ちゃんが堂々としてたら、それで済む話じゃないか。
こっちは友だちと遊ぶ時間をつぶして、迎えに行ってやってるんじゃないか。
何言ってんだ。
しかし兄の気持ちもわからないではなかった。

自分の進む方向を自分で決められないのは、悔しいだろう。
人には好奇の目で見られ、弟には無視されて、
自分の身体をさらに呪いたくなるだろう。
どうすればよかったのか…。

ずいぶん経って、大人になってから、わかった、と思ったことがあった。
まっすぐ進むのと曲がるのと、どうすればよかったのか、と思ってきた。
兄の手足となるのが私の役割なら、曲がるのが正解なんだろう。
でも、コソコソと人目を避けるように歩き、生きていくのが正解なのか。
そんなことでいいのか…。

違った。
どっちかが正解なんじゃない。
どっちも間違いだったんだ。
本当の正解は、たとえ障害を持っていても、
堂々とまっすぐに歩いていける世の中をつくることだ。
そうでなければ、おれたちみたいのは、
まっすぐ進んでも、曲がっても、困ったことになる。
選べる選択肢のどれをとっても困ったことになるのは辛い。
何十年も覚えちゃってるくらい、辛い。
あのときの私たちは、もっと他のことを話したり、遊んだり、できたはずだ。
気にすんな、なんて言われなくても、気にならない世の中にしたい。
すべての子ども、
すべての人々が、
もっと気兼ねなく、
もっとのびのびと、
もっとごきげんに生きていいし、
生きられるはずだし、
生きられる世の中にすべきだ。

私は、社会活動家として、生きています。